



ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン(1770-1827)
＜第9＞を作曲していた頃のベートーヴェン
(1823年、ヴァルトミュラー作による油彩画)

交響曲第9番二短調 ＜合唱＞ 作品125

作曲年 1822～24年

初演 1824年5月7日ウィーン、ケルントナートーア劇場

献呈 プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世

＜第九＞の誕生

- 1792年 シラーの「歓喜の頌歌」を音楽化する計画を固める
- 1807年 結尾で合唱が器楽と合体するようなオーケストラ作品を作ろうと考える
- 1808年 ピアノと合唱とオーケストラのための＜幻想曲＞作品80が生まれる（第9の終楽章の主題が、クフナーの歌詞で決定づけられている）
- 1822年 「歓喜の頌歌」を合唱付きの＜第10交響曲＞なるものの終楽章にしようとする（素描だけに終わる）
- ～1823年 ロンドンのフィルハーモニー協会から交響曲を依頼される
第9の初めの3つの楽章を作曲し、＜終楽章＞は器楽だけで書くことをきめる
- ～1824年 ＜終楽章＞にシラーの「歓喜の頌歌」を入れて、すべてを完成する [ジャン・ヴィトルト著 ベートーベン]より

各楽章の主題

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロツポ・ウン・ポーコ・マエストーソ
ニ短調 4分の2拍子。ソナタ形式。はじめ16小節の間、ニ短調の属音上の和音でその3度をぬいた細分音が奏され、その間に第1主題の主たる動機がいなずまのようにちらつき、あとにゆくほどそれが激しくなり、クレッシェンドして第1主題に高まってゆく。(配布冊子には譜例を掲載)

第2主題は変ロ長調で現れる。第2主題は第1主題と異なって、たのしい性格のものである。(配布冊子には譜例を掲載)

第2楽章 モルト・ヴィヴァーチェ ニ短調のスケルツォ 4分の3拍子。
古典的交響曲においては第2楽章は、緩徐な歌曲的な楽章をおくことになっているのだが、ベートーヴェンは、初めてその原則にしたがわないで順序の変更を敢行した。この楽章のいちじるしい特徴は、速度が極度に速いことと、ティンパニが5度でなく、へ音のオクターヴに調律されていることである。(配布冊子には譜例を掲載)

第3楽章 アダージョ・モルト・エ・カンタービレ 変ロ長調 4分の4拍子。
この楽章は二つの性格を異にする主題の変奏的並列のかたちをとっている。(配布冊子には譜例を掲載)

第4楽章 この楽章は奇怪な騒音で始まる。(配布冊子には譜例を掲載)

この騒音は低音弦の叙唱によって一度ならず、中断される。ついで第1楽章の初めの部分がふりかえられる。叙唱をはさんで第2楽章の部分。また叙唱があつて第3楽章のはじめの旋律がふりかえられる。つぎに合唱の旋律の動機が木管で現れ、少しのもつれののちに低音弦からはじめて、歓喜の旋律がだんだんにもりあげられてゆく。

(配布冊子には譜例を掲載) [最新名曲解説全集 1 交響曲 I]より

自筆譜と原典版の比較

* 配付資料に譜例を掲載しています

<自筆譜の複製> 第4楽章の冒頭 (C27-652)

<ベーレンライター原典版> 第4楽章の冒頭 (B12-818)

<自筆譜の複製> バリトン・ソロの冒頭 (C27-652)

シラーの頌歌〈歓喜によせる〉

この曲には「シラーの頌歌〈歓喜によせる〉による終末合唱をもつ」と記されている。そのため、この曲は〈合唱〉または〈合唱つき〉と呼ばれることが多い。これまでの古典的な交響曲が声楽を全然もたなかったのに対し、この曲ではじめて4人の独唱者と混声の合唱団を必要とするものが誕生したのである。そして、その第4楽章は、フリードリヒ・シラー(1759～1805)の「歓喜によせる」の頌歌からの句を歌詞とするというわけである。もっとも、ベートーヴェンは、このシラーの頌歌全体に音楽をつけたのではなくて、自分の気に入った部分を選び出して、それをここで用いたのだった。

このシラーの頌歌は、フランス革命直前の1785年にドレスデンで書かれたもので、独唱と合唱の交互の指定をもっている。当時26歳の青年詩人は、ドイツの封建的な政治形態と専制主義的な君主制に苦勞してきただけに、ここで人類愛と何百万の人たちの団結による人間解放を理想として高らかに歌ったのだった。そして、シラーは、はじめてこれに「自由によす」という題をつけようとしたが、当時の官憲のきびしさから、「自由」を「歓喜」にあらためたのだったという。そして、この頌歌は、当時の青年や知識人の間で、かなり広く愛好されていた。

それから、フランス革命、ナポレオンの出現という大事件がおこり、ベートーヴェンも、古い専制君主制を破壊し、新しい民主的な世界をつくりだしてゆくかみえたナポレオンに好意を示したりもした。こうした性格のベートーヴェンにシラーの頌歌が気に入られたのは、まことに当然のことといわなければならない。

(作曲家別名曲解説ライブラリー 3 ベートーヴェン)

歌詞対訳： 歓喜によせる(PolydorPOCL9571/3)

小石忠男訳

O Freunde, nicht diese Töne !
Sondern last uns angenehmere anstimmen,
und freudenvollere !

おお友よ、この調べではなく
さらに楽しく、よろこびに満ちた歌を
うたおう！ (ベートーヴェン詞)

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elysium,
wir betreten feuertrunken,
Himmlische, dein Heiligtum!
Deine Zauber binden wieder,
was die Mode streng geteilt ;
alle Menschen werden Brüder,
wo dein sanfter Flügel weilt

よろこびよ、美しい神の火花よ、
樂園に生まれた少女よ、
われわれは情熱的に酔い、
お前の天にある聖堂に進む！
お前の不思議な力は、世の慣習が
断ち切ったものを結び合わせる。
その柔和な翼の下で、
すべての人びとが兄弟となる。

Wem der grosse Wurf gelungen,
eines Freundes Freud zu sein,
wer ein holdes Weib errungen,
mische seinen Jubel ein!
Ja, wer auch nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle
weinend sich aus diesem Bund.

Freude trinken alle Wesen
an den Brüsten der Natur ;
Alle Guten, alle Bösen folgen
ihrer Rosenspur.
Küsse gab sie uns und Reben,
einen Freund, geprüft im Tod ;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
und der Cherub steht vor Gott!
Froh, wie seine Sonnen fliegen
durch des Himmels prächt'gen Plan,
laufet, Brüder, eure Bahn,
freudig, wie ein Held zum Siegen.

Seid umschlungen, Millionen!
Diesen Kuss der ganzen Welt!
Brüder! Überm Sternenzelt
muss ein lieber Vater wohnen.
Ihr stürzt nieder, Millionen?
Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such' ihn über'm Sternenzelt!
Über Sternen muss er wohnen.

幸にも友の中で
まことの友を得たもの、
いとしい妻を得たものは、
すべてよろこびの声を合わせよ!
そう、世に一つでも、人の心を
自分のものとしたものはともに歌え!
それを拒むものは
泣きながらこの結束から去れ。

すべてのものは、大自然の乳房から
よろこびを飲む。
すべての善、すべての悪が
自然のばら色の足跡を追う。
自然はわれわれに、くちづけと葡萄、
死の試練を経た友を与えた。
快樂はいやしい人間に与えられ、
光の天使ケルビムは神の御前に立つ!
天の妙なる計画に従って
多くの太陽が運行しているように
兄弟たちよ、お前たちの道を進め、
よろこびをもって英雄が勝利の道を
歩むように。

抱き合おう、もろびとよ!
このくちづけを全世界に!
兄弟たちよ! 星空のかなたに
愛する父は住みたもう。
お前たちはひざまずくのか、もろびとよ。
創造主を予感するのか、世界よ。
星空のかなたに神を求めよ!
星のかなたに必ず主は住みたもう。

＜第九＞ Q & A

Q. 初演は成功したのだろうか？

- A. 初演の指揮はウムラウフが振ったが、ベートーベンが舞台上で総指揮を取り、最後の合唱が会場にこだまして、大拍手にそれが変わっても、すでに耳が全く聞こえなくなっている作曲者には、その歓声が聞こえず、歌手の一人がベートーベンを聴衆の方に向けて、彼は初めて場内の熱狂に気づき、この曲の成功を自ら確かめることができたのであった。

[クラシック名曲ガイド 1 交響曲]より

Q. 日本における＜第9＞の初演は？

- A. [第1次大戦後の]1918年(大正7年)6月に、徳島県鳴門の郊外にあった坂東ドイツ人俘虜収容所で、初演された。実際、日本人でこの演奏を聴けたのは、音楽界の功労者であった徳川頼貞侯爵など、ごくわずかだったと推定される。

[第九 歓喜のカンタービレ]より

Q. 日本で＜第9＞が年末に演奏されるようになったきっかけは？

- A. 1940年12月31日、午後10時30分から注目すべき＜第9＞の放送があった。指揮ローゼンストック、日本放送合唱団というメンバーだが、この放送について、当時のNHK洋楽担当職員の三宅善三氏が雑誌「放送」41年1月号に次のように書いている。「大晦日の夜に第九交響曲を演奏することは、欧州各地に於て習慣となって居り、この場合は大抵夜の十一時過ぎから演奏が始まり、終末音楽の歓喜の頌歌と共に新年に入ると云う趣向であるが、国情の違う我国ではそう云う訳にも行かないので、三十分を繰上げて、歓喜の合唱に佳き年を祝いつつ、これを以て本年掉尾の音楽放送にしたのである」。

[第九 歓喜のカンタービレ]より

Q. CDの収録時間は、なぜ75分？

- A. CDと＜第9＞は、実は切っても切れない深い関係がある。というのも、最大74分42秒というCDの収録時間は、カラヤンが「＜第9＞が1枚に収まる長さにしてほしい」と、友人で、1979年当時、ソニー副社長だった大賀典雄氏に助言したから、決まったのだ。 [第九 歓喜のカンタービレ]より

OPACによる検索

キーワード欄に ベートーヴェン 交響曲 9 と入力してください。

↓

作品名から Symphony no. 9, D minor, "Choral symphony", op. 125 = 交響曲第9番ニ短調「合唱付き」 を選択します。

この所蔵リストで興味のある資料が見つかった場合には、

詳細検索画面の、請求記号欄に

半角英数で請求記号 (例：CD22-550 など) を入力